

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

今回は、今年の夏休みに南三陸ベースで活動された3つの女子高校の生徒の皆さんの感想と、高校生の時に引率の先生とともにボランティア活動を経験した大学生が、2年ぶりに石巻ベースで活動し、感想を寄せてくださいましたので、ご紹介します。

東日本大震災被災地であっても報道が少なくなっていますが、他の地域では、被災地の現状を知る機会がほとんどなく、既に復興が完了していると思われていること、直接被災地に足を運んだことで現実を知ることができたという学生の皆さんの感想から、今後もニュースレターなどを通して被災地の現状を少しでも多くの方に知っていただけるよう、情報発信し続けていくことの重要性を感じています。

「東北での出会いと学び」

カリタス女子中学高等学校 教諭 森 匡史

本校では東日本大震災後すぐの夏休みに、初めて高校生を東北の被災地に送り出しました。それ以来、春・夏・冬の長期休暇の度に、生徒を東北へ派遣しています。これまでに延べ360人がボランティアとして東北を訪れています。

生徒たちは現地でのどのような経験をし、そこから何を感じているのか。今回は、この夏休みにボランティアに参加した生徒のレポートの中から、彼女たちの生の声を紹介したいと思います。

◆現地の方のお話を聞いて、人にはそれぞれ違うストーリーがある、と改めて感じました。被災した、といってもその形はそれぞれで、復興の形も様々です。今回、そのいくつかのストーリーに触れて、自分のものの見方が増えた気がします。

今回のボランティアを通して、私は「人と交わる」とはどういうことか学ぶことが出来ました。宮城の方々は、どの方もとても温かくて優しくかったです。それは、人と人との繋がりを大切に、感謝の気持ちを持って人に接しているからだと分かりました。感謝の気持ちを忘れず、交わりを大切にすれば、自分の世界がもっといいものになる、と宮城の方々に身をもって教えていただきました。

◆現地の方に寄り添うようにボランティアをして欲しい、と最初に言われました。でも、実際に被災した方々の心に寄り添うのは出来ません。そんなことしてほしくないと思う人も中にはいると思います。ただその人のすぐそばまで寄り添えなかったとしても、話を聞いて誰かの支えになってあげることが私たちにでもできることだと思います。心の深くまでは踏み込むことができないからこそ、私たちに出来ることを探してボランティアをし、寄り添おうと思う気持ちが大切なのではないかと思いました。



漁業支援



染め物体験のお手伝い

◆ボランティアに行かせていただくにあたり、沢山の方に支えられてきました。ボランティアは人を助けているようで、私たちも助けられていると思います。ボランティア先の方、活動を見守ってくれた方、ボランティアに行かせてくれた方全ての人にお礼を伝えたいです。ありがとうございました。この経験を忘れずに過ごしたいと思います。

◆この4泊5日のボランティアで出会った方々はどなたもとても親切にしてくださって、大変だった方を助けるのは当たり前なのに、ボランティアで来た私たちにありがとうと言ってくれました。被災された方は被災した方だからこそ思うことがあって、それを他の人にも伝えていかなければいけないのだと強く感じました。

生徒たちは現地での出会いを通じて色々なことを感じ、多くのことを学んでいるようです。それは、これからの彼女たちの人生にとって大きな糧になることでしょう。たくさんの出会いと学びに、改めて感謝したいと思います。

本校ではこれからも、生徒たちをボランティアとして東北に派遣していきたいと考えています。高校生がボランティアとしてできることはわずかですが、そこに聖霊が働き、豊かな実りをもたらしてくれると信じています。



震災から7年 ボランティア活動に参加して

東京純心女子中学高等学校

私は、東北の復興は7年も経っているため、進んでいると思って行った。しかし、実際に行ってみると、進んではいるものの、まだ住めないようなところもたくさんあった。まだ生活感もなく、復興も終わっていないのだなと実感した。

高野会館という震災遺構を訪れたが、ここは4階まで津波が来たということに驚いた。自然の力の大きさに怖さも感じた。近所の人や知っている人が流されていくのがその屋上から見えたと聞いて、被災地の方々の心の傷は治るのに時間がかかるということの意味が分かった。他にも様々な被災地に連れて行っていただいたが、ベーススタッフ千葉さんが「友達や家族を亡くした人たちに、ボランティアで来た人たちが、本当の意味で寄り添うことはできない」と言っていたことが印象に残った。大切な人を亡くした心の傷に、私のような経験のない人が寄り添うことは、完全にはできないということを知った。壊れた建物は時間はかかるけど修復することはできる。しかし、被災者の心の傷は壊れたら直せばよいものとは違い、単純ではないから難しい

ということを実感した。どんなに地域が復興しても、心の復興はその何倍もの時間がかかるし、完治はしない。

そのような状況の中でも、被災地の方々は、ボランティアの私たちに優しくしてくださった。そのおかげで、東京で学ぶことのできないことを沢山学ぶことができた、充実した5日間だった。(A.Y)



民間震災遺構の高野会館



イチゴ農家さんでのお手伝い

私は、今回のようなボランティア活動に初めて参加しました。被災地を訪れるのも初めてでした。震災から7年経った今は、自分が想像していたよりも、復興はあまり進んでいないという印象でした。ボランティアを受け入れてくださる方々は、新しく来るボランティアの人に作業の仕方を何度も説明しなければならないので面倒だろうと思っていたけれど、実際は全くそんな様子はなく、本当に丁寧に説明してくださいました。“効率”を考えると全くよくないことでも、被災地の現状を多くの人に知ってほしい、震災を忘れないでほしいという、強い思いがあるからなのだろうな、と作業をしながら思いました。

地元の語り部の方と現地をまわり、お話を聞くこともできました。実際に津波が押し寄せてきた建物の前に立つと、テレビで見ただけでは全く想像もつかないくらい高い位置まで波が来ていたことがわかり、本当に津波の怖さを実感しました。

今回、ボランティアという形で被災地を訪れたことで、新たなことに気づいたり、貴重な体験をすることができました。(S.K)



語り部の方からお話を聞きました



漁業支援（結び昆布作り）

始めていた児童たちを津波がのみ込みました。列の後方を歩いていて、危険を察知した高学年の数人の児童は、自己判断で学校近くの裏山方向へと避難し、助かりました。



校舎の壁はえぐられ、体育館の柱は崩れ落ちた旧大川小学校

戸倉小学校は、偶然にも震災前日、避難訓練を行っていました。それまで学校の屋上に避難していましたが、高さが不十分だと判断し、避難場所を近くの山に変更しました。震災当日、迅速な行動のおかげで、先生、児童、さらに地域住民が助かり、奇跡の避難をした学校でした。

この2つの小学校から3つのことを感じました。

1. 自分の命は自分で守る

危険な状況に陥っているときは自分が正しいと思う逃げ方をすることが大事だということです。自分の命は自分で守ることを強く感じました。

2. 日頃の避難訓練を大切にする

戸倉小学校では避難訓練によって多くの命が助かったことを知り、日頃の訓練が大切だと感じました。

3. あの日の記憶を風化させない

大川小学校は当時のまま残っており、児童が授業を受けていた面影があり、7年前そこにいた人たちの姿や当時の賑やかな雰囲気が目の前に浮かび上がっていくようでした。一瞬にして子どもたちの日常は奪われてしまいました。しかし、小学校を残しておくことは、震災の記憶を風化させないために大切なことだと思いました。

次に、ボランティア活動では、2種類の漁業支援、農業支援、子どもの見守りを行いました。漁業支援の時、とても明るく気さくに話をしてくださった漁師さんが、震災のお話をするときは、打って変わって重々しくゆっくりと話されたことが印象に残りました。農業支援では、イチゴの苗の間引きをお手伝いしましたが、イチゴはとてもデリケートで、イチゴをひとつつくるのにたくさんの時間と労力を必要とすることがわかりました。子どもの見守りでは、職員の方が子どもたちをさん付けで呼んでいて、最初は驚きましたが、子どもたち一人一人を職員の方が大切にしていることを感じました。



東日本大震災被災地ボランティア 2018

ノートルダム清心中・高等学校

私たち、ノートルダム清心高等学校・高1の8人は、8月10日から12日までの3日間、宮城県登米市にあるカリタス南三陸ベースで、東日本大震災被災地ボランティアを行いました。

主な活動内容は、被災地見学、漁業支援、農業支援、子どもの見守りでした。

まず、被災地見学では、活動1日目の午後、ベーススタッフに南三陸町を案内していただきました。その見学の中で、津波に対する避難という面で、心に残った2つの小学校がありました。石巻市の大川小学校と南三陸町の戸倉小学校です。

大川小学校は、全校児童108名中74名が亡くなりました。海岸にあった木材が、小学校近くの橋に流れ着き、津波をせき止めていましたが、やがて、せき止められなくなった津波が、左上から右下方向に押し寄せ、校舎に到達しました。この時、右上から左下方向に避難を

「いかないとわからない」～カリタス石巻ベースでの活動に参加して～

上智大学 宇野安奈

私たちは、東北のボランティア活動に参加して、実際の被害を目で見て肌で感じることの大切さや、仲間と助け合う大切さ、被災地の方々の温かさや優しさを感じ、学ぶことができました。ボランティア先で、広島土砂災害について心配してくださる方が多く、「共に寄り添う」という考えを持っていらっしゃいました。それは、一度震災を経験したからこそだと思いました。



写真左：南三陸町旧防災対策庁舎

無残に曲がった赤い鉄筋と工事の殺風景な様子が印象に残った

写真右：JR気仙沼線の線路として使われていたもの

7年経った今でもまだ直っていないところが多く、鉄骨が折れ曲がったままの場所もあり、改めて被害の大きさを感じた

メディアで放送された震災当時のお話を聞いたことがありましたが、実際に現地に行ってお話を聞くと、報道しきれなかった事実や現地の人々の本音を見聞きすることができ、とても良い経験になりました。現地の方のお話で一番印象に残ったのは、「避難して何も無いのは当たり前」という言葉です。その方は、東日本大震災とチリ津波で二度、被害を受けておられ、避難することの大切さを強く伝えてくださいました。



写真左：南三陸町のモアイ像

モアイはチリイースター島の言葉で「未来を生きる」という意味を持ち、過去の記憶を大切に、現在を生き、未来に向かって歩み続ける東北の人々のシンボルのような存在であると感じた

写真右：南三陸さんさん商店街

震災後、復興の光としてつくられた商店街。「前を向いて歩き続ける」という東北の人の精神に触れることができた気がして、逆に元気づけられる場所だった

また、現地の人たちを手伝うことで、少しでも力になれた気がして、とてもうれしく思いました。現地の人と一緒に復興に向かっての活動をするのはなかなか経験できないことなので、印象に残りました。

最後に、私たちは、東北に行く前まで、東北がもうほとんど復興していて私たちがすることはあまりないと思っていました。しかし、実際に行ってみると、いたるところが工事中であり、震災の爪痕が生々しく残っていました。ボランティア活動においても私たちのできることは山のようにあり、継続的な支援が必要だと感じました。今回、見聞きしたことを心に留めておくだけでなく、積極的に自ら感じたことを伝え、より多くの人に東北の「今」を知ってほしいと思いました。



9月11日から9月13日に、石巻ベースに滞在させていただきました。2年ぶり、3度目のボランティア参加で感じた以前との変化、そしてベースでの様子について書かせていただきます。

2015年、初めて石巻を訪れた時には、高校に提出したレポートのタイトルにもしたように、「いかないとわからない」と強く感じました。それは「CDショップでは店頭で東北出身のアーティストのCDが並んでいた」「地域ごとに復興のスピードの差がある」といった、メディアで伝えきれないような、細かい気づきや地域が抱える問題のことでした。



2年前、建設中だった災害公営住宅及びその周辺は、道路も整備され、新たな住宅街となっていました (写真：2016年7月21日撮影)

今年は、当時とは違う意味で「いかないとわからない」という印象を受けました。行かないと、ひとかけらの情報も得られないということです。神奈川県で、普通に暮らしていると、全くと言っていいほど東北の復興の話題に触れることはありません。自ら意識して、インターネットなどで探さないと、情報が得られないのです。一方、こちらに滞在すると、テレビをつけても、新聞を見ても、毎日、進捗状況がどうか、復興の話題が当たり前にあります。地元のことを伝える新聞・テレビ局だから当たり前のことかもしれませんが、それにしても、なぜ他の地域では全く、取り上げられなくなってしまったのでしょうか。「3・11」を忘れてはいけない」とよく聞きますが、うわべだけなのではないでしょうか、と自省も含めて、感じた3日間でした。

石巻ベースでは、新たな利用者さんも増えていたり、かつては仮設住宅でのお茶っこでお会いしていた方が公営住宅に移られてからも、わざわざベースに来てくださったりしていることを知り、石巻ベースが利用者の方々に愛されていることを実感しました。その仮設住宅で3年前にお会いした方に、偶然石巻ベースで、再びお会いすることができました。また、ベースで以前お会いした方とも、今回お話ができました。まさかお会いできると思っておらず、お元気そうな姿が見られて、本当に嬉しかったです。賑やかな石巻ベースでは、1日があっという間でした。また来ることができて本当に良かったです。

石巻ベースで今回迎えてくださったスタッフ、シスター、ボランティアの皆様、ありがとうございました！3日間お世話になりました。



旧石巻市立大川小学校 震災後、時間が止まっているかのように感じました